

第 19 号

2001年1月

社會經濟史學會中國四國部會
會報

編集発行

中国四国部会事務局
(松山大学経営学部内)

藍經濟を背景とした

阿波の近世文化

中国四国部会理事 三好昭一郎

徳島県は吉野川流域の阿波北方と勝浦川以南の阿波南方とに大きく分けられ、北方は藍作地帯で南方は穀倉地帯とされてきた。北方農村部は毎年のような吉野川の大氾濫で米作ができなかったため、米の代作として古くから藍が栽培されてきた。文安2年(1445)の「兵庫北関入船納帳」によると、藍は阿波だけから畿内に積み登していたことでわかるように、この地は室町中期のころ既に藍の大生産地帯を形成していたものと考えられている。戦国末期に堺に進出し、やがて畿内を制圧した三好長慶は、弟の義賢たちの軍事力によって支えられていたが、その軍事力は阿波から堺に積み出した大量の藍と南方の木材で得た強大な経済力が支えていたといわれる。

天正13年(1585)に阿波に入部した蜂須賀氏は、吉野川流域で広範に栽培されていた藍から莫大な運上銀を徴収するようになるが、とくに延宝期(1673-80)以降におけるわが国の衣料革命の進行を背景として、藍に対する需要が急増したことから、年次ごとに栽培面積が増え、幕末には約2万町歩に増えている。収穫した葉藍は藍師によって加工されて染料としての^藍にされ、さら

に搗き固められた藍玉に仕上げて江戸・大阪をはじめ全国の市場に出荷された。そのため大量の藍玉を扱った藍商たちは徳島城下の新町に沿った船場町などに店を構え、白壁の藍蔵を建てて藍玉がこの付近に集散した。

これらの藍商たちは藍玉の売込みのため諸国を旅して顧客に振舞うことが定着すると、各地の芸能を城下に伝えたので、徳島城下は芸所として繁栄を誇るようになっていった。そのような諸芸は次第に盆踊りに取り込まれることによって、宗教的色彩の強かった踊りは元禄・正徳期ごろから急激に遊芸本位の踊りに変質するようになった。とくに文化期(1804-17)になると城下に藍大市が立てられるようになり、諸国の藍問屋や仲買人が藍玉の買付けに徳島城下に向くようになると、芝居興行なども盛大になった。城下外れの二軒屋町や佐古山麓などでは、1年を通じて繰り芝居・歌舞伎・チョンガレ・斬・軍書講釈・軽業・相撲などが興行されるようになると、城下の町人社会は浮き立つような賑わいをみせるようになってくる。

町人社会におけるそのような芸能環境は、当然のように武家社会にも反映し、三味線を弄ぶ武家や寛文11年(1671)この方、盆の禁足令を破って踊りで渦巻く市中に出て踊り狂じる武家も増えていった。とくに宝暦～文化期には若い武士たちが歌舞伎に似寄せた俄の組をつくり、禁足令の出る盆の3

日間を過ぎると、大店の座敷などに招かれて俄を演じ、何ほどかの礼金を稼ぐといったものまで現われた。これには藩も放置できず、目付役に命じて厳しく取締らせ、また三味線を弾くことを禁じるなどしていることも史料によって知られる。そうしたことも藍の取引で賑わった徳島城下の特殊な文化現象であるのだろうか。

2000年度事務報告

活動報告

会報17号、18号の発刊

社会経済史学会へ中国四国部会大会を報告(2000.1.8)

大会開催予告、発表申込者の受付(6.25)

理事会開催通知(8.13)

理事会開催 於、岡山大学経済学部(9.2):出席者・岩橋 勝(代表理事)、松尾寿(島根)、在間宣久、森元辰昭(岡山)、及川順(山口)、平田桂一(愛媛)、三好昭一郎(徳島)、村山聡(香川)
議題1. 報告者、報告論題決定通知(報告者宛)(9/10)

2. 2002年度大会開催場所を山口大学とする。

3. 事務局交代について(岡山大学から松山大学へ)

4. その他

理事会開催場所等について
報告者に報告者・報告論題決定通知(9.10)

理事に理事会報告を通知する(9.10)
総会(11/11)で新役員、2000年度会計報告(5頁に掲載)が承認される。
来年度開催場所を徳島とする。

会員状況

1998年度 175名(1998.11.3.現在)

1999年度 172名(1999.11.6.現在)

2000年度 172名(2000.11.11.現在)

新規加入者:伊藤康、山根正明、石川陽春(以上島根)、張楓(広島)、岸本覚(鳥取)、船越豊(山口) 以上6名

退会者:三好昌文、井川克彦(以上愛媛)、山田隆夫、藤井昭(広島)、井上佳余子(徳島)、大村照夫(京都)

以上6名

2000年度大会報告

社会経済史学会中国四国部会大会が、2000年11月11日(土)、12日(日)の両日にわたり島根大学大会館で開催された。自由論題報告(11本)、シンポジウムでは質問・意見が出され盛会であった。

11日は自由論題、総会終了後、懇親会が開かれ、盛会のうちに終わった。岩橋勝代表理事が語られたように、今大会では中国四国各県から学会員が参加した。また報告は日本関係に集中していたが、その司会に外国史を専門とする先生方が担当されるなど、「歴史」という同じ舞台で垣根を越えた交流の場になったことも注目できよう。

今大会のプログラムは次の通りです。

11月11日(土) 個別報告

第一会場:前近代史

1. 「出雲府中の景観について」

報告者・山根正明氏、司会・井上寛司氏

2. 「徳島城下における塵芥処理対策について」

報告者・三好昭一郎氏、司会・松尾寿氏

3. 「近世出雲のたたら経営—ト蔵家文書から」

報告者・高見誠司氏、司会・道重哲男氏

4. 「近世における村の休日の研究」

報告者・有元正雄氏、司会・三好昭一郎氏

5. 「岡山県美作における明治6年『解放令』反対騒擾の実証的研究」

報告者・若林義夫氏、司会・村山聡氏

第二会場：近現代史

1. 「北海道移住の諸類型－鳥取県を事例に」

報告者・伊藤康氏、司会・佐藤正志氏

2. 「明治期備中南部地域における手作地主経営」

報告者・内田豊士氏、司会・及川順氏

3. 「明治期の蘭産業にみる資金供給の様相－旧備中国都字郡早島村寺山家の事例」

報告者・上廣尚子氏、司会・下野克巳氏

4. 「広島県における小作料統制令の運用」

報告者・坂根嘉弘氏、司会・富岡庄一氏

5. 「『日泰文化会館』建設計画と戦時下の建築政策－アジア太平洋戦争期の日本の建築について」

報告者・石川陽春氏、司会・平田桂一氏

6. 「戦時・戦後経済統制期間における木履産業の構造的特質－広島県松永産地を中心に」

報告者・張楓氏、司会・千田武志氏

11月12日(日) シンポジウム

「歴史の中の石見銀山－その開発・技術と支配・経営の諸問題」(9:30-12:30分)

問題提起「石見銀山の概要－シンポジウムの予備知識のために－」(松尾寿氏)

報告1. 「石見銀山の開発と展開」(井上寛司氏)

報告2. 「幕領鉱山石見大森と但馬生野－幕末維新期の鉱山町住民の動態－」(荻慎一郎氏)

報告3. 「発掘調査からみた石見銀山の採鉱と製錬」(遠藤浩巳氏)

報告4. 「『石見国銀山旧記』と銀山附役人」(小林准士氏)

総括コメント(岩橋勝氏)

全体討論(司会・松尾寿氏、相良英輔氏)

2000年度島根大会の

模様

松山大学 岩橋勝

2000年度大会の約1ヶ月前、鳥取西部地震が中国・四国地域を襲った。震源地が松江市に近く、開催中止も危惧されたが、島根大学関係者のご尽力により11月11日(土)、12日(日)、新築の大学会館で予定通り開催。50名を超える盛況だった。本学会の地方部会で最も参加者の多い近畿部会の夏季シンポジウムでも近年は50名を超えることが珍しい。充実した個別研究報告の応募が11もあり、一方かねて準備されたシンポジウム「歴史の中の石見銀山」が部会会員を惹きつけたのであろう。本部会を構成する9県すべてからの参加者が見られたのもきわめて印象的であった。

今回は開催校から事前にすべての会員に報告要旨集が配布されたので、不参加者も大会の模様を知る事ができた。ほとんどが地域内の史料に基づく事例分析であり、他の地域との比較・位置付けを意図したものである。個別報告は2分科会に分かれていたのですべてについて傍聴することはかなわなかったが、出席できた限りの印象では徳島城下の塵芥処理の問題、近世村の休日数に東西日本で大きな差異があったことの意味を問う問題、戦時期統計データの利用が困難となる時期の地場産業・下駄の動向を丹念に分析した報告等、多くについて今後の展開可能性からも誌『社会経済史学』に投稿されて、その成果を広めていただきたいと思った。

さて、2日目のシンポジウムでは4つの視点から石見銀山を分析した報告が行われた。それに先立ちコーディネーターの松尾寿氏から「問題提起」にかき、史的考察に

必要な予備的知識の解説が行われた。本大会後、10日経たずして石見銀山がユネスコで「世界遺産」に登録されるというニュースに接した。きわめて時宜を得たテーマのシンポに立ち会うことができたのである。

第1報告「石見銀山の開発と展開」(井上寛司氏)は、16-17世紀わが国産銀ブームの先駆けがなぜ石見大森なのかを問題とし、3つの点からその必然性を明らかにした。中世水運上に石見が占める位置、発見・開発者の博多商人・神谷寿禎が中国貿易に通じて銀輸出の有利さを知っていた事、加えて戦国期富国強兵資金源としての開発競争である。近年高まっている東アジアからの視点が入っており、今後は国内的契機よりもここで提起されたような国際的視野に基づく研究の深化が期待される。

第2報告「幕領鉱山石見大森と但馬生野・幕末維新期の鉱山町住民の動態」(荻慎一郎氏)は石見銀山の影響を受けて開発された但馬生野の事例を中心に、鉱山町の労働力のあり方を分析。一般的には諸国鉱山を家族ぐるみで渡り歩くイメージがあるが、意外に定着性が認められ、雇用が不安定となると家族がそれぞれの分野へ出稼ぎというかたちで一時的に「移動」するにすぎない事が明らかにされた。歴史人口学的にも興味ある問題である。

第3報告「発掘調査から見た石見銀山の採鉱と製錬」(遠藤浩巳氏)は本シンポ唯一の考古学者による、主として開発当時の技術レベルにまで踏み込んだ、銀山遺跡の総体を知る事の出来る手堅い報告であった。出土物や遺品等の成分分析から、たとえば灰吹き法を確認していくというような研究手法は文献史学者にはきわめて新鮮に感じ

られた。

第4報告『石見国銀山旧記』と銀山附役人」(小林准士氏)は、石見銀山の由来を知るための基本史料となっている「銀山旧記」をきわめて詳細に異本と照合し、史料批判を施して、その成立過程をうかがうことにより新たな史実を読み取ろうとする、意欲的な報告である。およそすべての史書・編纂物には記録者の意図が反映されるわけであるから、そのようなモチーフにまで踏み込んで史料利用の限界を明示するのみならず、逆にその記録意図まで類推して利用価値を高める方法もあることを学んだ。

最後に貨幣流通史研究の立場から、16-17世紀銀山開発の国際的契機、近世において銀貨が幕府通貨として果たした役割等につき私が若干の解説を加えた後、4報告に対し質問と感想を表明させてもらった。とくに強調したかった事は、石見銀山開発時、新大陸ではアマルガム法により大量の銀製錬を行い、その多くがヨーロッパないし太平洋経由でアジアに届く事となるが、古代以来丹生(水銀)の使用に慣れていたわが国がなぜ同じアマルガム法を導入せず、灰吹き法に終始したかということである。前者の使用は人体に甚大な影響を与えるので、わが国は当初より経験的にそれを忌避したとすれば、環境と経済の問題を考える際の重要な一つの史実となると考えられる。しかし、司会者の時間延長への配慮も限界に来て、ほとんど討論のための時間を残す事が出来ず、午後1時前、大会終了となった。

前年度の岡山大会終了以来、本大会のためにいろいろとご配慮頂いた松尾寿理事はじめ、島根大学スタッフのみなさまに心より感謝の意をあらためて申しあげる。

中国四国部会ホームページのお知らせ

中国四国部会のホームページを開設しました。

<http://www.cc.matsuyama-u.ac.jp/~hiratak/>

または松山大学ホームページの for staff をクリックして、経営学部の Hirata Keiichi をクリックしてください。中国四国部会のホームページがあらわれます。

2000年度会計報告(1999年11.6-2000年11.11)

収入の部		支出の部	
前年度繰越金	399,578	封筒・切手代、用紙代	61,760
会費徴収	131,500	発送事務アルバイト代	20,000
内 訳 92年度 1口	1,000	大会補助費(11/11)	30,000
93年度 1口	1,000	理事会会議費(11/11)	15,000
94年度 1口	1,000		
95年度 3口	3,000		
96年度 4口	4,000		
97年度 5口	5,000	小 計	126,760
98年度 9口	9,000		
99年度 20口	20,000	次年度繰越金	404,318
2000年度 85口	84,500		
2001-2003年度 3口	3,000		
合 計 (11/11 現在)	531,078	合 計 (11/11 現在)	531,078

2001年度役員

代表理事 岩橋 勝

理 事 松尾 寿(島根)、下野克巳、森元辰昭(岡山)、道重哲男・富岡庄一(広島)
及川 順(山口)、伊丹正博(香川)、三好昭一郎(徳島)、平田桂一(愛媛)
田村安興(高知)、鳥取は空席

幹 事 千田武志(広島)、勝部真人(広島)、在間宣久(岡山)、村山 聡(香川)、
佐藤正志(徳島)、高橋基泰(愛媛)、木村健二(山口)

監 事 辻岡正己、太田健一

顧問 内藤正中、比嘉清松、奥田秋夫、渡辺則文、高橋 衛、小川國治、神立春樹

事務局 平田桂一(事務局長)、渡邊孝次

社会経済史学会理事 岩橋 勝(松山大学)、加藤房雄(広島大学)

事務局 〒790-8578 愛媛県松山市文京町4-2

松山大学経営学部 平田桂一研究室

社会経済史学会中国四国部会事務局

電話 089-925-7111(代表) E-mail: hiratak@cc.matsuyama-u.ac.jp

+++++

+ 郵便振替口座番号 01670-9-61454 +

+ (加入者名 社会経済史学会中国四国部会) +

+++++

社会経済史学会中国四国部会開催地・報告件数(1980年度以降)

年度	開催期日	大会開催地	報告数
1980年度	1980年11月23日	鳥取県(鳥取県立博物館)	11報告
1981年度	1981年10月4日	島根県(島根大学)	8報告
1982年度	1982年10月2・3日	愛媛県(松山商科大学)	11報告
1983年度	1983年11月19・20日	広島県(広島大学)	9報告
1984年度	1984年10月13・14日	山口県(山口大学)	8報告
1985年度	1985年11月30日、12月1日	香川県(香川大学)	7報告
1986年度	1986年12月6・7日	岡山県(岡山大学)	9報告
1987年度	1987年10月28・29日	高知県(高知大学)	6報告
1988年度	1988年11月26・27日	広島県(広島経済大学)	8報告
1989年度	1989年10月14・15日	鳥取県(鳥取県立博物館)	6報告
1990年度	1990年11月17・18日	徳島県(鳴門教育大学)	3報告:他学会共催
1991年度	1991年11月9・10日	島根県(島根大学)	7報告
1992年度	1992年11月7・8日	広島県(広島大学)	12報告
1993年度	1993年11月6・7日	愛媛県(松山大学)	9報告
1994年度	1994年11月5・6日	岡山県(岡山大学)	10報告
1995年度	1995年11月4・5日	山口県(山口大学)	10報告
1996年度	1996年11月2・3日	香川県(香川大学)	14報告
1997年度	1997年11月1・2日	広島県(広島大学)	11報告
1998年度	1998年11月7・8日	高知県(高知大学)	11報告
1999年度	1999年11月6・7日	岡山県(岡山大学)	10報告
2000年度	2000年11月11・12日	島根県(島根大学)	15報告
2001年度		徳島県	
2002年度		山口県	

編集後記

事務局が岡山大学から松山大学に移転しました。まだ事務局体制が整っていないため、何かと不自由をおかけするかもしれません。皆様のご協力をお願いします。

会報19号をお届けします。今年度は11月に徳島県で中国四国部会の大会が開催されます。そこで三好昭一郎先生に、ご無理

を言って、阿波の近世文化について書いていただきました。

岩橋勝代表理事には昨年度の島根大会の様様について原稿を寄せていただきました。これからも先生方や院生の方に会報掲載の原稿をお願いすることになるかと思いますが、その節は、是非ご協力下さいますようお願い申し上げます。 平田桂一